



『感謝の心』

奈良県

大和青少年文化研修道場

中学3年生 中谷美咲

私は来年から高校生になります。私の道場は所属できるのが中学生までなので、道場に通うのは今年が最後です。この一つの節目の時期にもう一度剣道について考えたとき、真っ先に思い浮かんだこと、それは「感謝の心」です。この「感謝」にはたくさんの人や物事に対する私の気持ちが込められています。

一つ目は、自分が今剣道ができるということに対する感謝です。私はある出来事が起こるまでは剣道ができることは当たり前のことだと思っていました。当たり前のように稽古に行き、当たり前のように試合に出してもらおう。特になにも感謝の気持ちなど考えたこともありませんでした。それは、小学6年生の3月のことです。出場を楽しみにしていたスポーツ少年団の全国大会が震災のため中止になりました。もう使うことのない奈良県代表の名札を眺めながら、残念な気持ちでいっぱいになりました。でも、震災のニュースをみて被災地の惨状を知り、私の試合に出られない残念な気持ちなんてとてもちっぽけな感情にすぎないと思うようになりました。被災地には稽古をする場所や道具を失っただけでなく、生きていくのも困難な状況におかれている剣士がいるのではないかと考えると、自分がいつも通り剣道ができているということがとてもありがたいことなのだ気づきました。

二つ目は、いつも稽古につれて行ってくれたり、試合の応援に来てくれたりする家族に対する感謝です。私がまだ低学年のころ、どうしても稽古に行きたくないとぐずることがよくありましたが、母が無理やり私の手を引っ張って道場に連れて行ってくれ、ちゃんと稽古を見て励ましてくれました。また、高学年になってどうしても試合に勝てなくて苦しんでいるときは一緒に悩み、時には厳しく叱ってくれ、折れそうになる心を奮い立たせてくれました。このようにつらい時も支えてきてもらったので、今、少々いやなことがあってもふんばることができるのだと思います。

三つ目は、いつも稽古をつけてくださる先生や、一緒に稽古をしてくれる道場の仲間に対する感謝です。

「剣道とほかのスポーツのちがうところはどこや。」

稽古がきつくて、声が小さくなってきたり、動作が機敏でなくなってきたりして道場に活気がなくなってきたとき、先生はいつも私たちにこう問いかけられます。剣道は、先生や先輩の大切な頭を叩かせてもらって強くさせてもらうところがサッカーや野球などのスポーツとは違うところです。だから、私たちは常日頃から感謝の気持ちを持って稽古に臨まなければいけないと教えられてきました。先生は、寒くても、暑くても、膝が痛くても、肩が痛くても、私たちに稽古をつけてくださいます。また、先生からは剣道だけではなく日常生活面でも様々なことを学びました。大将をしていた時は、稽古がきつくて自分のことだけでなく周りのことも見えなくては大将が務まりません。「目配り気配りが大事やで」と先生から教わりました。この教えは、学校での生活でもとても活かされています。良い師、仲間恵まれ、心も体も鍛えられたと思います。そして、剣道を通じて自分を高めてくれる素晴らしい人たちに出会えたことにも感謝したいと思います。

「感謝の心が高まれば高まるほどそれに正比例して幸福感が高まっていく。」

という偉人である松下幸之助さんの名言もあります。自分がいまおかれている環境は当たり前のことではなく、とてもありがたいことであり、常日頃から感謝の気持ちを持っていると自分だけでなく周りの人たちも幸福になれるのではないのでしょうか。私は剣道に出会い、あらゆるもの、あらゆることに感謝することの大切さを学びました。これからも剣道で学んだ感謝の気持ちを持って、初心を忘れずに純粋な心で人生を歩んでいきたいです。